

修士論文（要旨）

2013年1月

幼児期における子どもの気になる行動の把握とその対応について  
—保育者と保護者の認識とその差異—

指導 山口 一 教授

心理学研究科  
臨床心理学専攻

211J4009

佐野富有子

## 目次

I. 問題提起と目的 .....	1
II. 調査 1 .....	1
1. 調査対象 .....	1
2. 調査用紙 .....	1
3. 調査方法 .....	1
III. 調査 2 .....	1
1. 調査対象 .....	1
2. 調査用紙 .....	2
3. 調査方法 .....	2
IV. 調査 3 .....	2
1. 調査対象 .....	2
2. 調査用紙 .....	2
3. 調査方法 .....	2
V. 結果と考察 .....	2
参考文献	

## I. 問題提起と目的

幼稚園、保育園において、保育者または周囲の人々から、いわゆる「気になる」行動をする  
と捉えられている子どもたちが生活している。本郷（2006）は保育者にとって「気になる」行  
動をする子どもを「気になる子」として捉え、『気になる子とは、「落ち着きがない」「感情  
をうまくコントロールできない」「他児とトラブルが多い」などの特徴を持つ子ども』として  
いる。幼稚園、保育園生活において、気になる行動をする子どもは、明らかな精神障害や知的  
障害は持っていない、あるいは当面診断が不明であるなどの理由で、周囲の理解が得られにく  
く、その理解困難な行動から他者からの評価を低くしてしまうことが考えられる。このように、  
子どもの特性を把握する上で、子どもたちの「気になる」行動は、子ども一人一人の行動の理  
解と予想に基づく適切な保育の遂行が困難になっている。にもかかわらず、「気になる」行動  
を評価するための尺度として、信頼性ならびに妥当性を十分に備えたものは見当たらない。以  
上のことから、本研究において、幼児期におけるいわゆる「気になる行動」を評価するための  
尺度を作成するための基礎資料として、現在の保育の現場における気になる行動の種類やその  
頻度を把握し、理解することを目的とする。さらに、保護者にも同様の調査を実施することで、  
保育者との認識の違いを明らかにしたい。

本研究は、調査 1、調査 2、調査 3 とも桜美林大学研究倫理委員会の承認を得て行った。(2012  
年 3 月受理 No.11038)

## II. 調査 1

### 1. 調査対象

首都圏の幼稚園・保育園に勤務する保育者 144 名。

### 2. 調査用紙

子どもの気になる行動アンケート

「気になる子どもの行動チェックリスト」本郷（2005）、「幼児の行動チェックリスト  
（CBCL/2-3）日本語版」中田ら（1999）、「幼児の問題行動に関する因子構造モデル」矢嶋  
ら（2000）、「幼児の自己主張－自己抑制に関する質問紙」首藤（1995）と、保育者からの  
意見を参考に、子どもの気になる行動を問う質問項目、計 51 項目にまとめた。

### 3. 調査方法

アンケート調査実施の同意が得られた幼稚園・保育園の園長（もしくは担当者）に対し、調  
査の趣旨と倫理的配慮の説明、質問紙の配布を行った。その後、園長（もしくは担当者）から  
在籍しているすべての保育者へ質問紙を配布してもらい、保育の空き時間に回答をお願いした。  
回収は翌週までに郵送していただいた。

分析は、回答の数量化を「ある：0 点」、「ない：1 点」とした。その後、最尤法・Promax  
回転を用いて探索的因子分析を行った。

## III. 調査 2

### 1. 調査対象

A 県の B 幼稚園に通う年中児・年長児の保護者 346 名。

## 2. 調査用紙

調査 1 と同様のアンケートを用いて、一般的な子どもの気になる行動を、最大 20 問まで○を付けてもらった。また、自身の子どもの気になる行動も同様の調査用紙を用い、いくつでも○を付けてもらった。

## 3. 調査方法

調査の同意を得た B 幼稚園の園長に対して、調査の趣旨と倫理的配慮の説明、調査用紙、調査に関する詳細を記述した手紙を持参した。そして 4, 5 歳児（年中児年長児）を担当する保育者からそれぞれの家庭に提出用の封筒とともに、調査のアンケート用紙を配布し、調査に同意が得られた保護者に回答していただくこととした。回答したアンケート用紙は、定められた期限までに、提出していただき、B 幼稚園にて密封した封筒のまま保管していただく。その後、検査者が受け取りに伺うという形をとった。

気になる行動結果の回答の数量化を「ある：1 点」、「ない：0 点」として集計した。「一般に子どもの気になる行動」の回答結果は、調査 1 の「保育者が気になる行動」との認識の違いを $\chi^2$ 検定を用いて検証した。また、調査 1 と「一般に子どもの気になる行動」「自身の子どもの気になる行動」の因子構造を比較した。

## IV. 調査 3

### 1. 調査対象

調査 2 と同様

### 2. 調査用紙

子育ての楽しさと悩みの度合いを「1.大いにある」～「4.まったくない」で、評定してもらい、さらに子育ての楽しさ・悩みの内容を質問した。さらに現在の育児サポートや希望する育児サポートをそれぞれ「4.大いに感じる」～「1.まったく感じない」で質問しサポート源ごとの尺度得点を算出した。

### 3. 調査方法

調査 2 と同様に B 幼稚園に配布した。

「自身の子どもの気になる行動」とサポート源別の現在の育児サポート、子育ての悩みや楽しさの程度「希望する育児サポート」との関係重回帰分析を用いて検証した。さらに、子育ての悩みと楽しさに関する自由回答を、KJ 法で分類し回答の傾向を調査し、育児の悩みや楽しさの程度に差があるか一元配置分散分析を用いて調査した。

## V. 結果と考察

保育者の気になる子どもの行動は、第 1 因子「集団への適応の困難さと情動抑制の困難さ」（ $\alpha$  係数.70）、第 2 因子「コミュニケーションの乏しさ」（ $\alpha$  係数.71）、第 3 因子「反抗的行動」（ $\alpha$  係数.55）の 3 因子となった。

次に保護者が気になる行動は、第 1 因子「集団への適応の困難さと情動抑制の困難さ」（ $\alpha$  係数.79）第 2 因子「コミュニケーションの乏しさ」（ $\alpha$  係数.68）の 2 因子となった。保護者が自身の子どもの気になる行動は第 1 因子「落ち着きのなさ」（ $\alpha$  係数.69）、第 2 因子「集団への適応の困難さと情動抑制の困難さ」（ $\alpha$  係数.69）、第 3 因子「反抗的行動」（ $\alpha$  係数.64）、

第4因子「コミュニケーションの乏しさ」（ $\alpha$ 係数.57）の4因子となった。

保護者自身の子どもの気になる行動、子育ての悩み楽しさの度合い、現在のサポート、将来希望するサポートの関連について、従属変数を子育ての「悩み」、「楽しさ」とし、独立変数をそれぞれ「気になる行動」、「現在のサポート」とした重回帰分析、従属変数を「希望する将来のサポート」とし、独立変数をそれぞれ「気になる行動」、「現在のサポート」、「悩み」、「楽しさ」とした重回帰分析を行った結果、第1に保護者は自身の子どもの気になる行動の中でも、「集団への適応の困難さと情動抑制の困難さ」による行動が多いほど、子育ての悩みが大きくなっていること、さらに、保護者にとって、多くのサポートが得られていると実感できることが、子育ての楽しさにつながっていることが明らかになった。第2に、保護者は自身の子どもの気になる行動の中でも、「コミュニケーションの乏しさ」による行動が多いほど、将来サポートを希望していることが示された。また、保護者は、現在得られているサポート量にかかわらず、家庭外で得られるサポートの割合が高いほど、将来サポートを希望する割合が高いことが、明らかにされた。

今回の調査結果から、保育者が気になる子どもの行動と、保護者が自身の子どもに対して気になる行動は類似しており、保育者が子どもの行動を適切に理解し「気になる」と受け止めていることが分かったが、一方で保育者が考える気になる行動と保護者が考える一般的な子どもの気になる行動には違いがあり、保育者と保護者が気になる行動として捉える背景に、認識の違いがあることが明らかになった。保育者は、専門的な視点に立ち、発達に問題があると思われる行動や集団の中で目を引く行動について「気になる」と捉えている一方で、保護者は子どもが集団から孤立しかねない行動に敏感に反応し、自身の子育ての悩みとして直結させていることが明らかになった。

さらに、保護者は、「コミュニケーションの乏しさ」の行動に対してサポートを求めていることが分かった。この行動は、発達に問題のある行動である可能性も考えられ、より専門的な支援を求める傾向にあると言えた。保育者が、保護者の認識や心情を理解した上で保育の現場から支援を行うことによって、保護者のニーズに沿った適切な支援につながるだろう。

## 参考文献

- 本郷一夫 2005 「気になる」幼児とは 言語 34 9 42-49
- 本郷一夫 2006 保育の場における気になる子どもの理解と対応 特別支援教育への接続  
ブレーン出版 41-49
- 中田洋二郎、上林靖子、福井知美、藤井浩子、北道子、岡田愛香、森岡由起子 1999 幼  
児の行動チェックリスト(CBCL/2-3)の日本語版作成に関する研究 小児の精神と神経  
39 4 305-316
- 首藤敏元 1995 幼児の自己主張-自己抑制に関する質問紙 心理測定尺度集IV 子ども  
の発達を支える：対人関係・適応 52-63
- 矢嶋裕樹、齋藤友介、中嶋和夫 2000 幼児の問題行動に関する因子構造モデルの検討 東  
京保健科学学会誌 3 3 166-172